

事例紹介 2 地域と親の願いを包括できる地域子育て支援センター

～出合い・触れ合い・支え合い～

井野 よし子 旭丘まぶね保育園地域子育て支援センター
「ハーモニー」センター主任

私は、仕事を持っていましたので、子育てに関しては産休明けから保育所でお世話になり、親子ともども成長したと思います。在宅で子育てをされている親、とりわけ母親の置かれている環境やストレスについては、実際に支援センターにかかわるまで、理解できませんでした。むしろいつも親子でいることができ、親としての喜びや子どもの情緒の安定によい効果があるとさえ思って、とてもうらやましく思っておりました。これは25年前の子育て観ですが、今思うと、認識不足でとても恥ずかしい限りです。

私たちが支援センターで大切にしているのは、子どもの生活、発達を保障する立場で、親の目線で支援をとらえていこうということです。それには、親へのインタビューやアンケート調査にもご協力いただき、教育大学などの研究機関との連携を図り、ストレスへの対処として、海外での子育て支援システム、例えばオーストラリアのイングルズランド大学で生まれ、WHOも推薦している子どもの心を育てる教育的プログラム「フレンズ子ども支援」など、基本的な知識と技量を高め、質的支援の追求に努めています。

在宅の母親が願う育児支援は、地域の保育施設にあったのです。働いていないから保育所に行けないが、支援センターで親子で安心して遊べると、大変喜んでおられました。ここまでは、スタッフや保育士が中心に支援の輪を進めてまいりました。

次に、大きなセンターの実践の特徴として、民生児童委員のかかわりがあります。地域資源の活用の始まりですが、親と民生委員との間には世代間のギャップも見られました。そこで認識の共有を図るために、スタッフが仲立ちになり、経験をともにすることで顔見知りになりました。子育て支援のコミュニティーネットワークづくりの初期段階です。具体的には、民生委員1人1人のキャリアを支援センター活動に反映させ、柏もちづくりや小正月を祝うなど、季節の行事や地域の文化の伝承で相互理解が深まりました。

次に、支援センターを核に、支援活動を保育園外へ広げ、地域資源を積極的に活用しました。民話の会が次世代育成を目指して行うサークル支援には、コミュニティーネットワークの存在が欠かせません。そこには、人と人をつなぐコーディネーター的役割の人材確保が必要です。サークル活動を共にした母親から、「人のつながりを身近に感じて、子育てを地域で支えられているという実感を持ちました」という感想を聞きました。

支援センターの取り組みをまとめると、母親のピアサポート、チーム支援です。そして、センターでできること、やりたいこと、求められていることを行うことだと実感しました。

子育て支援にかかわり、地域資源を視野に実践して、人を思いやる気持ち、ともに生きることの大切さ、すばらしさを肌で感じました。今後もこのことを大切に、子育て中のお母さんや子どもたち、若い方に伝え、共に育んでいきたいと思っています。